
Dearest

月原 智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear est

【Nコード】

N2038B

【作者名】

月原 智

【あらすじ】

記憶をさかのぼる……。彼女と出会いそして、別れ……。

第1話

うだるような暑さ・・・。

家の前の木からは、安眠妨害なセミの声が聞こえる・・・。

「はぁ・・・。」

もうとっくに鳴り終わってしまった目覚まし時計に目を向ける。

『?!』

俺は慌てて飛び起きた。

今日は特別な日。

「急がないと!!」

と言いつつも、目の前のアルバムを見ながら記憶をさかのぼらせた・・・。

【Dearest】

Dearest・・・Dearの最上級・大切な人

「・・・」

俺の大切な人は3年前の冬、俺の前から消えた。

その日は、とても寒い日で、その年初めて雪が降った日でもあった・・・。

【Dearest】第1章「ごく普通の始まり」

俺と彼女が出会ったのは、とてもムシ暑い夏のこと。

その日はいつもの先輩達からの電話もメールもなく、本当にヒマな一日だった。

午前中を寝て過ごした俺は、クーラーの無い部屋から抜け出すため、遊び相手の「要」^{かなめ}に電話をかけた。

プルルル・・・プルルル・・・

数回のコールがなった後に要が出た。

「ふぁい。玉城ですけど・・・。」

寝ぼけた声・・・。

「あ、俺やけど、今ヒマ？」

暑さから抜け出したいキモチが、俺を早口にさせる。

「なんや、お前かいな……。」

なにやら騒がしい音が、後ろから聞こえてくる。

「親戚のガキが遊びにきとって、大忙しやねん。悪いな……。」

あゝあ、要もダメかよ……。いや、説得してみるか……？

くだらない悩みを思い巡らせているうちに、一方的に電話を切られてしまった。

「ちきしょう！今日は、この暑い中かよ……。」

気持ちを静めるために、俺は机の引き出しからタバコを取り出した。火をつける……。

そのタバコどくとくの香りが部屋の中を満たしてゆく。

「走りに行くか……。」

つけたばかりのタバコを灰皿に押し付けて、バイクのキーを手に取り家を出た俺は、近くの海までながしに行くことにした。

海辺に着くと、やたらとカップルが目についた。

軽く舌打ちをして近くの空き缶を蹴飛ばした。

「……イッターイ！！」

運悪く、近くに座っていた女の人にあたってしまった。

慌ててその場を立ち去ろうとした。

遅かった……。

「何？君ヤツアタリ君？」

やわらかい声につかまった。

「い、いや……。その……。すみません。」

軽く頭を下げて帰ろうしたが、俺の腕を彼女は放してくれなかった。

「なんだよ……。マジかんべん。放してくれよ……。」

彼女は俺の手を放すどころか、ひっぱて強引に俺を座らせた。

その隣に彼女も座る。

いきなりのことで戸惑う俺……。

「なっなんなんだよ！！」

おとなしく座った俺に、自分でしときながら驚いている彼女の顔をにらみつけた。

「君、今日ひとりでしょ？」

彼女は挑発的な笑顔で返してきた。

以外に綺麗な顔に、思わず視線をそらした。

クスクスと笑いながら彼女は話を続ける。

「私も、1人なの……。彼氏にフラれちゃって……。」

彼女の顔から笑顔が消えていく。

そして、次に現れたのは一筋の綺麗なナミダだった。

やっかいな事に巻き込まれたのは、解かってた……。

ただ、彼女を置き去りにしたまま帰るなんて俺には出来なかった。

第1章 終わり

第2話

【D e a r e s t】第2章「出会いのその次」

彼女の話によると、彼女の彼氏は他に女をつくって、今はそっちと暮らしているらしい。

泣きながら話す彼女を、俺はどうすることもできなかった。

「こんな話聞かせちゃってごめん……。君のほかに1人っぽい人がいなかったから、つい……。」

なんとも自分勝手な理由。

でも、意外と怒る気にはなれなかった。

「別に……。俺、アンタの言うとおりヒマしてたし。そうや!! ヒマやったら俺と走りに行くか？」

思いつきにしては、結構良いほうだと思った。

すぐさま、ポケットからバイクのキーを取り出す。

せかすように、彼女の腕をつかみながらバイクの側まで連れて行った。

エンジンをかけようとする俺に、彼女は疑わしそうに聞いた。

「バイクに乗るのは、べつにいいんだけど……。君、免許持っているの？」

その質問に俺は普通に答えたつもりだった。

「俺、まだ15だけど……。一応走れるよ。ここまで来たし、事故ったこともねえし……。なんたって一番走りのうまい先輩にならったからな!!」

彼女が深いため息をついたのは、言うまでも無い……。

その後、さんざん説教された上に、わずかな小遣いで買っていたお気に入りのタバコまで没収されてしまった。

「さあてと……。ヒマだし、泳がない？」

いきなり話を切り替えられたので、俺はうなずくのがやっとだった。うなずいてから、やっと自分の置かれてる状況に気づくいた。

「いきなり言われても、俺、海パンねえよ!」

「あ、そんなこと? 気にしない、気にしない。」

気にしないっていったって、どうする気だ?

悩む俺をよそに、強引に腕を引っ張られていく。

バシャン!!

それはそれは、大きな波の音だった。

それと同時に、俺はずぶ濡れにされた・・・。

大笑いする彼女を前に、なぜだか俺も笑ってしまう。

すると、急に彼女の目から涙が溢れた。

とめどなく・・・。とめどなく・・・。

彼女は必死に涙をぬぐいながら言った。

「ごめん・・・。急に泣いたりして。君の顔、あまりにもそっくりすぎて・・・。彼の最後の笑顔に・・・。」

話しながらも、彼女の涙は止まることが無かった。

「そんなに泣いても、俺の前じゃ意味ないと思うぜ。」

なぐさめようのない彼女に、失礼とは思いつつ、この前読んだマンガの主人公の台詞を口走った。

「男ってやつは、女の涙に弱いもんだから・・・。」

そんな言葉でも、彼女の涙を止めればいいと思った。

「それでも、わかってるつもりなの・・・。でもね、会いたくても、もう彼には会えないの・・・。」

簡単な言葉じゃ癒せない・・・。

かといって、いまさら引き返せない・・・。

俺は、とことん話しに付き合う覚悟を決めた。

「全部、話してみろよ。俺には他人のことを話す必要があるようなヤツなんていねえし、時間だって余ってるからこそ、ここにいますだし・・・。」

彼女は首を横に振りながら答えた。

「でも・・・、ごめん。いえないの・・・。」

もどかしいキモチが頭の中を埋め尽くしていく。

それでも俺には、話すことを強制する度胸も、この場から立ち去る勇気もなかった。

無力さに苛立ちをおぼえる・・・。

空白の時間だけが、2人を包む。

夕焼けが静かに海を染めていった。

「昔のことって、気にするタイプ？」

ようやく口を開いた彼女が尋ねてきた。

「多少気にすることもあるけど・・・。」

いつの間にか、本音が口から出てくるようになっていた。

「そっかー、まあ、いつか。君、口堅そうだし。」

吹っ切れたように涙をぬぐった彼女は、静かに話を始めた・・・。

第2章 終わり

第3話

【Dearest】第3章「Dearest」

「私が彼とであったのは……。」

―今から、ちょうど一年前―

蒸し暑い日差しの中、つないだ手に汗がにじんでいる。

私の隣には、今の彼氏の陸。

でも、今日でその関係を終わらせるつもり……。

陸には、私以外にも何人もの【彼女】がいる。

付き合ったときから知ってた……。

そんなこと気にしないつもりだった……。

でも、あえない日が多くなつて私は貪欲になった……。

嫉妬した。【彼女達】に……。

『そろそろ、終わりにしない？』

つないでいた手を振り払って、私は言った。

『なんだよいきなり!!』

『私……、私以外にも彼女がいるんでしょ？もう、たくさんだよ!!』

すると陸は、はき捨てるように言った。

『前から、ウザイとは思ってたけどな……。お前がその気なら・

……。じゃあな!!』

一度も振り返ることなく、陸は行ってしまった。

―捨てられたんだ……。―

不思議と涙はでなかった。

心のどこかでもう吹っ切れていたのかもしれない。

それから私はあてもなく歩き続けた。

何をするわけでもなく、何を思うわけでもなく……。

ただ、ひらすら歩き続けた。

2時間ぐらい歩いただろうか……。

日がだいぶ傾いてきた。

ふと目をあげると、公園の前にたっていた。吸い寄せられるように、私は入っていった。

誰もいないベンチに腰掛けてつぶやいた。

『はぁ・・・。いいヤツだったのに』

そう言ったとたん、涙が溢れ出してきた。

必死に止めようとしても、止まるわけが無い。

その時だった。

『大丈夫？』

優しい声がした。

顔を上げてみると、サラリーマン風の男性が目の前に立っていた。彼はポケットからハンカチを取り出して私に差し出した。

『な、なんなの？ 私なんかにかまわないでよ！！』

振り上げた手がハンカチにあたり、椅子の上にひらりと落ちた。

『ナンパなら、他をあたってくれない？？』

―わたしばかり・・・―

イライラした。

『ナンパなんかじゃないって。』

彼は慌てて言った。

でも、私の耳には入ってこなかった。

混乱する私。

心の中に色々な思いが交差していく。

『よっぽどつらいことがあったんだね・・・。』

そういうと彼は、自分の両手で私を包み込んだ。

最初は、抵抗した。

けれど、彼から香ってくる甘く切ない香水の香りが私を落ち着かせる。

私は彼の腕の中で泣き続けた。

そのことがきっかけで、私たちは付き合うことになった。

でも、私には男を見る目がまったく無いようだ・・・。
幸せだったのは、ほんの少しの間だけ・・・。

3章 終わり

第

第4話・第5話

【Dearest】第4章「Dearest―2」

不幸の始まりは、ある一本の電話からだった。

その日は、彼と映画を見に行く予定だった。

そう、いつものように待ち合わせて、いつものように・・・。

―AM10・00に駅に。―

彼からのメールを確認して家を出た。

いつも待ち合わせをする駅には、とても大きな時計台があった。

その下で彼を待つ。

現在AM9・45。そろそろ彼が駅から出てくる時刻。

『・・・』

50分。55分。AM10・00・・・。

待ち合わせ時刻になっても、彼は来なかった。

心配になってくる。

連絡をとろうとケータイを開いた。

―着信アリの4文字が目飛び込んできた。

もしかして！！小さな期待に胸を膨らませながら、履歴を見るため

にボタンへと指を伸ばした。

―県立総合病院―

妹の病院からだった。一気に心拍数が早くなる。

どうしよう・・・。彼がまだきてないのに・・・。

あせる私に、時間は無邪気に押し寄せてくる。

とりあえず病院に行くただけ打って、メールを送った。

返事は来なかった。

けれど、私は病院へと急いだ・・・。

わり

第4章 終

【Dearest】第5章「Dearest―3」

203号室……。深呼吸をして息を整える。

私の妹は、生まれたときから心臓が弱く、数年前からは入院している。

その妹からの電話……。

恐る恐る扉を開けた。

『あ、お姉ちゃん!!』

扉の向こうには、元気すぎるほどの妹がいた。

『麻美!! 心配したのよ! 元気なのはどうして電話なんてしてきたの??』

『だって、お医者さんが呼んでくださいって……。』

『それなら、お母さんでも呼びなさいよ! もう、コッチが心臓止まるかと思った。』

麻美の声がだんだんと、泣き声に変わっていく。

『びっくりさせて、ごめんなさい……。でも、お姉ちゃん最近来てくれてなかったから……。』

『あっ、いやっ、そのお……。』

昔から妹の泣き顔には弱かった。

しゃくりあげる声と泣き声とが、妹からあふれ出す。

何をしろというのだろう……。

なすすべもなく、ただ目の前の光景を眺めていた。

ピピピ……ピピピ……

ふいにケータイがなった。

慌てて開いてみると、彼からのメールだった。

—今日は行けなくてごめんm () m

急に会議があって……。

それより、病院ってどこか悪いの? 心配……。—

それよりっていう単語に、少し腹が立った。

けれど、事故とかじゃないことには、ホッとした。

急いでメールを返す。

—なんでもないよ。ただ、妹のお見舞いにきてるだけ。—

彼とのメールのやりとりが続く。

ふいに麻美が話しかけてきた。

『お姉ちゃん。彼氏さん紹介してよ。ずっと病院だからヒマなの・・・ねえ?』

私は妹に言われるがままに彼にメールを送った・・・

「私どうしてあの人に断らなかったんだろう・・・もし、断ってさえいればあんな事になんて、ならなかったかもしれないに・・・」

彼女の目から、とめどなく涙がこぼれ落ちる。

いてもたってもいられなくなった俺は、彼女の腕を強引に引っ張って彼女を引き寄せた。

第5章 終わり

第6話・第7話

【D e a r e s t】第6章「消したい過去」

あれから、どれくらい時間が経ったのだろうか……。やたらと激しい抵抗をしていた彼女も落ち着いてきた。しかし、彼女の涙が止まることはなかった……。それでも彼女は、話し続ける。

―メールのやりとりから、30分後―

軽いノックの音が聞こえた。

『どうぞ。』

妹が返事を返すと、すぐに扉が開き彼が入ってきた。

『わざわざ、来てくれてありがとう。』

軽く頭を下げる。

私は彼の腕をつかんで、妹のベッドの近くに連れてきた。

『紹介するわ。妹の麻美。』

『よろしくね。』

軽い挨拶の後、麻美が頭をさげた。

『コッチが彼氏の……。』

『自分で名乗るよ。』

私の言葉をさえぎって彼が入ってきた。

『宮本一哉です。君の姉さんの彼氏さん。』

思わず笑いがこぼれた。

『自分で“さん”付けするなんて変なヒト。』

ふと思う……。

―妹の笑顔って久しぶり―

何時間かしゃべった。しゃべり続けて、笑いもした。そんな日が何日か続いた……。

第6章 終わり

【Dearest】第7章「消したい過去―2」

妹の病院に、二人で訪問するようになってから1ヶ月ほどすぎたころだった……。

妹の病気は順調に回復しているようにみえた。

いや、みえていただけであって、むしろだんだんと死が近づいてきていた。

そう、1ヶ月前のあの日、麻美の命はあと2ヶ月もっていいほうだろうと医師から告げられた……。

麻美は「ガン」だった……。

でも、本人は知らない。

周りが『元気になったね』という言葉をうのみにしていた。

あと1ヶ月……。知らされたほうにとっては、苦痛でしかなかった。

けれど、私の苦痛はそれではなかった。

一哉が浮気をしている。しかも、麻美と……。

あれは初めて和也と麻美が出会って2週間目のこと……。

今日も麻美のところへ二人で行く予定だった。

しかし急に仕事が入って遅くなってしまった。

―先に行って―

そうメールを送ったのが間違いの始まりだった。―

「一緒に行っていれば、あんなことなかったはずなのに……。」

俺の腕の中で彼女は泣き続けている。

どうしようもないやるせなさと、押しつぶされてしまいそうな苦痛と俺は必死で闘った。

彼女の話は、止まりそうに無かった。

―仕事を終えて、足早に病院へ向かった。―

今日は妹の好きな苺のショートケーキを片手に……。

『……』

病室はやけに静かで電気もついていなかった。

『麻美、寝てるのかなぁ……』

起こさないように、そうつと扉を横にスライドさせた。

めずらしくベッドの周りにカーテンがひかれていた。

窓からのやわらかい光がカーテンに2つの影をうつしだした。

その影たちは、私の目の前でだんだんと重なっていった。

はっとした私は、扉を閉めてしゃがみこんだ。

病室の中からは買ってきたショートケーキのような、甘い吐息と淡い声が聞こえてくる。

夢であってほしかった。

幻想だと思いたかった。

けれど、何年も前から使われている古いベッドは、二人の重さに耐え切れずに、気が狂ったようにきしむ音を奏でていた。

第7章 終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2038b/>

Dearest

2010年10月28日04時44分発行